

小学生区分

優秀賞

埼玉県

三郷市立新和小学校 五年
石川 周
いしかわ しゅう

ぼくの大切な思い出

ぼくはしゅう団行動が苦手だ。クラスの友だちにちよかいをだされるのも苦手だ。記おくがすぐなるし、薬をのまないと頭がもやもやする。ぼくは自へいしうだ。

小学一年生の8月に小笠原に引っこした。三郷の小学校とちがつて海が見えて校庭が広く木や花がたくさんはえていた。三郷ではひまわり学級だったけど、小笠原ではふつうのクラスに入ることになったので楽しみだった。

小笠原小に入ってすぐ友達ができた。同じ一年生だけじゃなくいろんな人と友達になれた。みんなフレンドリーでやさしい。学校から家の帰り道にある会社のおじさんたちとも友達になってよくはなした。ぼくは名前をおぼえることが苦手だったけど一年生の最後にはみんなの名前をおぼえることができた。

ぼくがお母さんから自へいしうだと教えてもらっ

たのはこのころだ。どうしてみんなみたいに勉強ができないのか聞いたら教えてくれた。なるほどなと思つた。仲のいい友達に話したけどだれもからかったりばかにしなかった。ぼくが苦手なことはたすけてくれたし、しずかにしなくちゃいけない時はおしえてくれた。はじめてテストで百点をとった時はみんながほめてくれてとてもうれしかった。

小学三年生の夏、お父さんの転きんで三郷にかえることになった。最初からわかつていたけどさびしかった。

小笠原のさいごの日、みんなが見送りに来てくれた。小笠原ではさよならじゃなくて「いってらっしゃい」と見送り、レイをプレゼントする。もらった人は船からレイを投げてレイが島に流れつくとまた小笠原にかえてこれるらしい。ぼくはもらったたくさんのレイを海に投げた。またもどってこれるように。

三郷にもどってからたまに思いだす。空がきれいな時や心の休けいしたい時。新しい友だちができたし毎日がんばっている。けれどまた、大切な島の友だちにあいにいききたい。

小学生区分

優秀賞

愛知県

いぬやま
犬山市立楽田小学校 三年
かとう あさひ
加藤 旭

あたらしく知ったこと

夏休みのはじめ、ちようこくてんへ行きました。ぼくは、気になる物があるとすぐにさわりたくなります。ママが、

「いろんなちようこくにさわられるよ。」

と、言ったのでぼくは、やったあとと思ってわくわくしていました。

そこは、ママの学校の先生が友だちと来ていました。あと、三年生ぐらいの男の子や、白いつえを持ったおじさんがいました。

その日は、目が見えない人も楽しめる日でした。目が見えない人は、ちようこくが見えないので手でさわって、形を感じます。ぼくは、目で見たり、気になるところをさわったりしていました。

ぼくは、ママの先生と、同じグループで、まわりましました。ちようこくのしようかいする、お兄さんも、いっしよでした。ぼくは先生に

「三年のかとうあさひです。」

と、自こしようかいを大きな声で言いました。先生は目がまったく見えないそうです。心の中で見えないってどんな感じかなと思いました。

一つ目のちようこくは、大きなサイでした。ぼくも、見てすぐ分かったけどそれと同じくらい速く先生もさわって、

「これは、サイ。サイのツノで分かった。」

と、言ったのでおどろきました。ぼくもその後、目をとじてさわってみたけど、さらさらしてるぐらいしか分かりませんでした。

先生はさわりまくってぼくが気づかないことも、たくさん、教えてくれました。目で見えるより、さわる方が気づくことが多いのかなあと、思いました。ぼくも、まねをしてさわりまくっていたら、顔が近くなって、いいにおいに気づいて、先生につたえました。先生も

「本当だね。」

と、言ってくれて、うれしかったです。

先生と同じグループでちようこくをさわって、分かったことがあります。先生の友だちは、目の見える人で、先生がさわっている時しずかにしていて、分からないって言った時だけ、ヒントをだしたり教えたりしていたことです。目が見えない人に答えを教えると、わくわくがなくなるからだと思います。ぼくだって、まん画のはん人を見る前に言われたらいやだから、同じことです。先生と先生の友だちは、たくさんおしゃべりしていて、すごく楽しそうでいいなと思いました。

どうやって話したらいいか、分からなくて、声がかけれなかったけど、べつのグループにいた、あの男の子といっしょに、ちようこくをさわってみたかったなあと、思いました。

ぼくは、はじめて、目の見えない人といっしょにすごしました。すごしてみて分かったことがたくさんあります。どうしたらいっしょに楽しくすごせるか、もっと知りたいです。もっといっしょに遊んでみたいと思います。

小学生区分

優秀賞

北九州市

明治学園小学校 六年

能美のうみにな

晴れの日を目指して

「一つだけ無人島に持っていきけるなら、何？」

何気なく聞いた私に、母は「眼鏡」と即答した。眼鏡がなければ動くことすらままならないというのだ。そんな極端なと笑い飛ばした私に、数日後、母は視覚障害の体験眼鏡を二種類渡した。一つは白いフィルムが貼ってあり、白濁体験ができる眼鏡。もう一つは先が小さくあいた黒い四角すいのレンズで、視野が狭くなった見え方が体験できる眼鏡。

かけた瞬間、怖いと思った。物の位置を把握しようとか、どのように動こうかとか考える以前に、とにかく怖いのだ。慣れた部屋の中のはずなのに、怖くて一歩も動けなかった。これが、私が視覚障害に興味を持ったきっかけの出来事だ。

調べているうちに、視覚障害の方のお話を聞く機会があった。行政支援の話、歩き方の話など聞く中、気になることがあった。「白杖をもつことに抵抗がある」

ターなどにある凹凸でできた文字を表す言葉だ。ではセイガンシャ、スミジという言葉はどうだろう。この言葉は、先ほどの二つの言葉に対応している。視覚に障害がない人を晴眼者、点字ではなくペンや鉛筆で書ける文字を墨字とよぶのだ。この言葉をはじめて知った時、障害を持たない人を「正常」と言わないことに、私はまず感動した。そう、視覚に障害があるということとは、異常とイコールではないのだ。

では現在の社会で、晴眼者と視覚障害者を区別しているものは一体何なのだろう。もしかすると、科学技術にも関係があるかもしれない。世界における低視力の最大の原因は、未矯正屈折異常だといわれている。つまり眼鏡やコンタクトレンズが手に入らないことによる視覚障害を持つ人が、世界中にはたくさんいるのだ。一方で、私のクラスでは約半数の友人が眼鏡をかけている。私もつい最近、視力検査で眼鏡の作製を勧められたばかりだ。それほどに、今の日本では眼鏡やコンタクトといった屈折矯正の技術は生活になじみ、入り込んでいる。おしゃれ眼鏡やカラーコンタクトなどの文化も出てきて、もはや眼鏡やコンタクトレンズは、視覚のバリアフリーアイテムからユニバーサルデザインへと進化を遂げた。眼鏡をかけているから視覚障害者だと思う人は、今の日本にはいないだろう。屈

という言葉が、何度も出てくるのだ。私はこれまで、白杖は積極的に持つべきだと感じていた。白杖は他者からはわかりにくい視覚障害を可視化するので、周囲の人の協力を得やすくなると思っていたからだ。だから、この思いを知ったときはとにかく衝撃を受けた。かわいそうだと思われたくない、白杖を持つことはもう治療に希望が持てないと自分でも認めてしまうことに思える、そんな思いがあることを初めて知った。さらに、周囲の人に見守っていてほしいけれど「普通の人」だと思われたいという葛藤があることも知った。そしてそんな矛盾はどうしようもないとわかつているからこそ、口には出せない悲しそうに話す姿を見て、胸がつぶれるような気持ちになった。

視覚障害者、点字という言葉を書いたことがあるだろうか。この二つの言葉はほとんどの人が知っていると思う。視覚に障害がある人を示す言葉と、エレベー

折矯正技術の発達と普及が、日本における視覚障害という壁の一部を解消したのだ。このように、科学技術の発達と普及は、障害を克服するための重要分野の一つといえるだろう。

障害のある方の心の中にある曇りを、少しでも晴らしていきける技術を確立し、普及させていくこと。これが今、晴眼者と言われている私たちの使命だ。

全ての人が気兼ねなく気持ちを表現できるような、視界も、気持ちも、明るくなるような晴れの日を目指して、私は進んでいきたい。